

平成九年、初めて大津市において「池田大隊、シベリアを語る会」の初会合があり、同席、以後交流を深めていただいておりますが、残念ながら本年四月に亡くなられました。この度、御家族の御好意により一部を発表させていただきました。

(岐阜県 鈴木 善三)

## 抑留生活

静岡県 小野 一男

初めて見る異国、北樺太であった。陸続きであつてもこのように異なるものだろうか。樺太の面影とは全く違つていた。青々とした森林がなく枯れ木の山で、農作物も、馬鈴薯、キャベツ畑ぐらいで、ブタ、ニワトリは野放しでやせていた。手入れをしないからだ。私物でなく皆、国のものだからというこらしい。九月半ばともなると北国の秋はもう寒く、朝夕は火の気なしではどうにもならぬ状態であつた。

戦争のために人手がなく、取り入れが終わるまでの作業であるということで、イモ掘り、キャベツの取り入れをさせられた。日常の食べ物は、少ない黒パンの配給だけで、イモを焼いて食べ、キャベツを生のままかじる。そのような日々が続いた。山にフレップと言ふ赤と黒の二種類ある酸っぱい味の実が無数にあつた。ソ連兵の目を盗んで取つて食べたものだ。宿舎の近くの子供達が鮭の干したのを持って、万年筆や鉛筆と交換に来た。どうせ使う事もないと思ひ交換するこゝとした。珍しいものは割が良かった。

一カ月くらいでイモ掘りが終わつて移動することになった。雪がチラチラ降る頃である。行く先は「北海道ダモイ(帰る)」と言つて行軍が始まつた。西海岸の北樺太で一番大きな港町アレキサンドリアと言ふ所に着いたが、町を素通りして山の中へと連れて行かれた。私達は、二百人くらいの集団であつた。五十人くらい入れる元民家らしきところに分散された。彼等の説明では、北樺太各地にいる日本兵がそれぞれ作業を終えて集まつて来るので、全員集結までの間というこ

とだそうだ。一週間くらい、ある者は暖房用の木を集める作業、ある者は港で船へ積み荷作業等に使われた。

十一月初め頃、出発準備の命令があった。「帰れる」皆、そのように思った。ソ連兵も「ダメイ、ダメイ」と言っていた。何か希望が出たように感じたのは私一人ではないと思う。船に乗るということで港に向かつて行軍する。港に大きな船が入っていて積み込みの最中であつた。小麦粉等食料品、色々な物が船の中へと消えて行く。日本へ帰る船としては様子が変だと思つたが、帰れるという喜びが強く、不安は別になかつた。

他地区より日本兵が次々に集結して、千人くらい集まつたようだ。薄暗くなる頃、積み込みが終わつた。その直後、「日本兵、乗船せよ」との命令が出た。内地へ帰れるんだ、本当に帰れると思ひながら乗船した。乗船後いつまでも出港する様子がない。空腹と疲れで私達は船底で寝込んでしまった。どのくらい過ぎたか、誰かの「船が動いているぞ」と言う声に

気がついた。船は南下していた。右手に黒く大陸が見える。あれはシベリア大陸だと思つた。南下している以上、北海道か内地の港に着くのだから。信用と淡い望みを持って、いつまでも寒い夜空を見つめながら戦友と語っていた。明るくなって陸地がはつきり見えて来た。シベリア大陸で、彼等に言わせると安全航海のためだと言う。不思議に思つた。不安な気持ちもあつた。二日、三日と船は南下して行く。北海道に着くのにしては日がかかり過ぎる。内地のどこかの港だろうかと良い方に考えていた。四日目と思う。入江のある港町に止まつた。町の様子はどうも日本ではないようだ。ウラジオの港と分かつたのは間もなくであつた。

船に積んであつた荷物降ろし作業が始まつた。荷物の陸揚げを手伝わされ、「終わつたら日本ダメイだ」ということである。暗くなる頃ほとんどの荷おろしが終わった。ろくな食物も支給されず労働できる体でないが、帰れるという一縷の望みと不安な心地であつた。

真夜中と思う頃、船が静かに兵隊を乗せて動き出し

た。次の日、さびしい漁港のような所に船が横付けと  
なった。とたんに「日本兵、船を降りろ」との命令が  
出た。ここはナホトカ港であった。

すべて裏切られた。今までは作業でも移動する時で  
も、信頼というか望みというか、帰れると心に言い聞  
かせて将校連中の言うことを聞いて行動をして来た  
が、もう頼りにするものはない。仲の良いグループが  
集まって助け合おうと心に決めたのは私一人ではな  
かった。

一寸先は闇であるということはこのことと思つた。  
ナホトカに上陸させられた千人くらいの部隊である。  
小雨の降る中を行軍が始まった。私ども兵隊は完全に  
疲れ切っていた。気力のみである。かつての帝国軍人  
の面影はどこにもなかった。どこへ行くのか、どうな  
るのか、ただ行軍させられた。連行と言うべきだろ  
う。昼は歩き、夜は野宿である。十一月も終わりと  
なる頃、シベリアの夜は特に寒かった。焚き火で暖をと  
り、重なるようにして横になる。腹はへってどうにも  
ならなかった。

一週間くらい歩かされた思う。そのとき分散すると  
の命令があった。二百人くらいに集結させられた。で  
きるだけ仲良しグループが一緒になるようにした。ま  
た行軍が始まった。四、五日くらいと思うが、道らし  
き道もない。山の奥へ奥へと連れて行かれた。家らし  
きものも見当たらずである。色々な話が本当のよう  
に伝わってきた。山奥で銃殺されるとか、絶対に帰る  
ことはないとか……。私は、どうにでもしてくれとい  
う気持ちになっていた。

山小屋に着いた。過去、人が住んでいたようであ  
る。以前何のために使われたのか分からぬが、私ども  
二百人くらい入れるようであった。川守田中尉が私ど  
もの指揮者で、私どもを集めて、当分ここに落ちつく  
ことになったと報告があった。薄暗い馬小屋のような  
家であったが、思えばナホトカに上陸させられて半月  
以上も野宿であり、屋根のある家はホテルのような感  
じがした。次の日、ノコ、マサカリを支給される。近  
くの山より木を切り、小屋の修理、炊事場、便所造り  
から、小屋の周りのバラ線張り、私どもが自分で入る

収容所造りをして入るのだから泣けてきた。

いよいよ木を切る作業をやらせられる。朝七時、起床。朝食はパン一切とスープ（中身なし）。五分とからぬ食事である。七時半、集合点呼である。点呼は人員の確認で、ソ連兵の頭の悪いこと。五列にして数を数えるのがなかなかできず、氷点下の寒さの中で大変であった。山の中へと向かう。一面松林である。三人一組で、二人で切り、一人は枝を取る。五メートルくらいに切り材木を作る作業である。仕事ができる体力でなく、寒さ、空腹で生きているのが不思議で、残っているのは気力だけである。

休みの日はシラミ取りと、それぞれ故郷の食べ物と言う話題で、死んだように横になっている。夢も希望もないとはこのことではなからうか。作業場に切った材木を運ぶ馬が入るようになった。昼に馬にエンバクを与えるのを横取りして食べたものだ。

干からびたキノコ、名は知らないが誰かが「食べられる」と言うので、そんなものをソ連兵の目を盗んで探したものだ。そんな日が続いた頃、栄養失調で何人

かが死んでいった。生きている者として明日が分からぬ状態であった。

そして、待ちに待った春が来た。雪は解けたが、寒さのために土は凍りついていてなかなか野草が出ず、どんな思いでそれを待ち望んだものだろうか。アカザ、ハコベが始めると兵隊達は作業の手を抜いて取った。こんなうまいものはないと思った。意地悪いソ連兵は、わざと小便をかけたたり、踏み散らしたりしたことが思い出される。

木を切る仕事を一応終わったのか、道路作りの作業につくこととなった。野草取り、小川の魚を取ることができたが、自由にできる訳ではなく、ソ連兵の眼を盗んでやるのであるから、手早くやる者は良いが、ノロマな連中は可哀相であった。物が豊かになれば皆で分け合って食べるようになり、私の無二の友、竹内と北とは特に仲良し同年兵ということもあった。竹内はすばしこく北はノロマで私は普通ということかな。何度も分け合って食べた。野草も日増しに豊富にとれるようになってから少しずつ体力もついてきた。

五月の初め、十キロメートルくらいの道路が出来上がり部落と連絡できるようになった。直後、移動命令が出た。「日本へ帰るのだ」ということだが、もう信用なんかしなくなった。また行軍が始まった。日中歩き夜は野宿であるがもう寒くないのであまり苦にならなかった。三―四日と歩かされた。山が見えない高原である。畑と水田がどこまでも続く。蒔きつけどきでトラクターが動いていた。

兵舎らしき所に着いた。「シマコフカ」と言う所であった。彼等の説明では、日本から迎えが来るまで農作業を手伝ってくれということだ。農場にはコルホーズ（集団民営）、ソフォーズ（国营農場）とに分かれていた。必要に応じて水田、畑へと連れ出されて労働をさせられた。宿舎は今までより良く、食事も十分とは言えないが仕方ないとあきらめた。作業は雑多、何でもやらせられた。

ある時、家を建てることになり、兵隊の中には大工、左官がいるので、彼らの要望に応じることはできた。材木を支給され、着手することになった。木を切

り、穴をあけ準備に入ったところ、顔色を変えて来た。大切な材木を小さく切ってしまったということである。日本では家を建てるときはこのようにしてやると説明しても取り上げてくれない。無視をすることに数日後、建前をやったとき、部落の人も見物に集まり、ハラショーであった。彼らは土台を作り、柱を立て、囲んで一番最後に屋根を造るのであるから、日本兵の作り方に理解を深めたようだ。

ジャガイモの草取りで種イモを取って食べた。親イモを取られたイモは日照の下でせっかくのイモがしておれてしまい、大目玉をくったこともあった。

倉庫関係の仕事はつらいが、喜んで希望したものだ。米、塩、砂糖が入れているので監視も厳しかったが、彼らの目を盗んで食べたり、持ち出しをしたものだ。

夏になり、水田の草取り作業はフンドシー一つで水の中に入るの、草取りより入浴としゃれこんだものだ。ナマズが水田の中にいるのを皆で追い回し、つかまえたが、稲がメチャメチャになってしまった。ソ連

兵もだんだん監視が厳しくなくなり、多少のことは見ないふりをしてくれた。

秋の取り入れが始まり、スイカ、トマトが良くできていた。わざと落として売り物にならなくして食べたのもこの頃であった。稲刈りは米の飯が食べた。隠れてモミを飯ごうに入れて鎌の柄で白米にする。炊くのが大変であったが、見渡す限りの平野とソ連兵の監視もあまりないので、連絡を取り合って発見されずという気苦労はあったが、また楽しみの一つでもあった。日本兵は何でも食べるとの意識を彼らに与えたようである。ソ連兵とて、黒パンと野菜のスープで十分とは思えなかった。一般人の食事と同じであるが、将校やハジヤイン、ナチャニック等は、白パン、肉、魚の食事で、彼らの言う「皆平等である」は、そうではなかったと言える。

秋も深まって、また寒い冬が来た。だんだん淋しい気持ちになってきた頃、作業に出た仲間より、日本兵がダモイというところで大勢汽車に乗って行くのを見たという話が広まった。本当に帰れるぞと信じる者、ま

ただまされて次の作業場へ連れて行かれるぞと言う者が、しばらく収容所内の話題となった。私は、もう何回もだまされてきたのであまり真剣に考えていなかった。帰りたいという気持ちはあったが……。

二十一年も残すところ余りない十一月の末に、水田の排水路の補修作業をやっていた。水の中は凍りついて、手足は寒さのためにしびれるようになり、冷たい風が無情にも吹いていた。そのとき、全員収容所に帰るように命令があった。帰ると、全員持ち物をまとめて集合ということだ。持ち物と言っても、やぶれ毛布、食器くらいで時間がかからぬ。夕方、全員集合、ダモイだということだ。幾度聞いた言葉だろうか。

二百人の日本兵が駅の方向に行動を始めた。夜中に汽車に乗り込んだ。どちらの方角かわからぬが、汽車は走り出している。今度は本当に日本へ帰れると信用している者が多かったが、私は次の作業場が待っているとと思った。そんな感じが強かったから、ぐっすり寝た。あたりが明るくなって汽車は平原を走っている。山らしきものは見えない。部落が右に左に見える。大

きな町に列車は着いた。ソ連兵にここはどこかと聞くと、ハバロフスクと教えてくれた。一年もいると片言のロシア語が話せるようになっていた。

しばらく汽車は動かなかった。次の指示を待っているようであった。人員の点呼があり、また走り出した。淋しいところに止まったり、人家の見えるところを走ったりして、次の日の夕方、海の見える町中の駅に止まった。全員下車することになった。ここはウラジオストックと言う港町である。一年前、荷降ろしをした所である。夜の行動がまた始まった。どうも移動するときは必ず暗くなつてからということが多い。一時間くらい歩いたと思う。ある建物に収容させられた。すでに準備があつたのだから、入り口以外はバラ線が張つてあつて、指示された室に二十人くらいずつ分散させられた。当分はここで迎えの船が来るまでいるとのことであつた。疲れていてあまりしゃべる者もなく、横になり静かに眠りについた。

「起床」の声で広場に集まる。点呼後、今日から町の中の道路補修の作業に従事してもらうとのことだ。

予感した通りになつた。あきらめ切つていたが、少しは夢と希望があつたのに。山坂の町・ウラジオ、港町特有の浜風が無情に骨までしみてくる。これからの冬を越すのは大変なことであり、前途心細い思いがした。町の中に洋風の建物があつた。門の両側に狛犬があり、二階中央に大きな丸い穴があいていた。ソ連兵に聞いたら、日本の領事館が昔あつたところださうだ。穴の部分は昔、菊の御紋が入つていたのであろう。戦前は、大きな顔した日本兵がいたところであろう。今はみじめな姿の兵隊が、奴隷のように使われていると思うと、切ない気持ちであつた。

また、出発の集合命令が出た。もう移動することは割り切つているので、またかくらいにしか思わなくなつた。準備をして室外に出ると、トラックが五台待機していた。荷物のように積み込まれて車は走り出した。どこへ連れて行かれるかと前のような強い不安はなかつた。数時間走つたと思う。着いた所には割合大きな建物が三棟あつた。周りにバラ線が張られてあつた。ここはアルチョムと言う炭鉱の町であつた。室外

に集められて、収容所長なる者より、明日より石炭を掘る作業に従事してもらうということであった。また初めての経験の炭鉱の仕事である。兵隊の中にも経験者はいなかった。二百人もいるので、ほとんどの職業の経験はあったが、炭鉱夫だけはいなかった。穴の中に入ってどのようにして掘るのか、各人勝手な想像で話していた。

宿舎は、十二人一室でシベリアに渡ってから一番良いと思った。「風呂があるぞ」誰かが、大声で知らせた。日本式の風呂でなく、湯をかぶるようになってきていた。

翌日、炭鉱へ連れて行かれた。石炭を掘る者、運ぶ者、地上に運ばれた石炭を貨車に積む者に役割を決められた。私は鉱内に入って石炭を掘る方に回された。ツルハシとスコップを支給され、カンテラと呼ぶ明かり取りのランプを持って、指示に従って中へ中へと入って行った。石炭のある所に着いて、今日からお前の現場と言われた。

段々の坂になって入り口より四、五百メートルくら

い入ったところである。背の高さくらいの石炭の層が無限に続いている。一日トン車で五台掘り出すのが、彼らの言うノルマであった。満足な道具もなく、初めての仕事で、体が痛いというよりしびれるという状態であった。ソ連の民間人と一緒だったので掘り方を教えてもらった。彼らは決して勤勉でなく、ただ仕方なく働いているということのようだ。炭鉱で働くようになって食物は少し良くなった。ノルマを達成した者に二百ルーブルが支給されることになった。パン、煙草くらい買えるようになった。

坑内は暖かく、零下三〇度にも下がる地上より、仕事は決して楽ではないが、寒いということもなく、仕事が終わって宿舎に帰ると風呂に入れるし、どうにか最低の人間生活ができるようになった。監視もあまり厳しくなくなり、許可があれば近くのマーケットのようなどころへ行けるようになった。

その頃、学習といって、日本帝国主義とソ連の考え方（良いことばかり）の話が、週一回くらい、定期的に行われた。いかに良い話を並べられても、だまされ



続けて来たので理解できるものではなかった。ある時「ロスケが……」と言って、「反動分子だ」とつるし上げられた。

娯楽とてないが生活に多少のゆとりができ、誰言うもなく将棋を作ることにした。木工係が見事なのを作ってきてくれて、夜はにぎやかにやったものだ。そのうちに麻雀を作ってきた。ソ連人の目を盗んでのことだから大変だったと思う。私の麻雀はシベリア仕込みである。

作業の帰りに石炭を各人、持ち帰るようにした。暖房に事欠かぬようになり、過ぎし日々が思い出され、良くぞあの寒さの中で生きてきたと語り合ったものだ。そんなときに、石炭貨車の入れ替え作業中に仲間の一人在事故で死んだ。帰国できる望みとてない毎日であったので、死んで楽になった幸せな男だと、埋めて帰る道すがら、誰言うともなく話したものだ。

春になった。毎日の仕事に変化はないが、暖かくなり、青々と野草が伸びてきた。シベリアに渡って初めての春、野草に随分世話になり良く食べたものだが、

今はどうにか支給される食物で間に合うので、誰も取って食べようという者がいなかった。正直なものである。アカザを取って準備をしたが、まずくて食べられなかった。のど元過ぎればなんとか、皆で大笑いをしたものだ。

五月に入り、物価が十分の一に下げられた。二百ルーブルは使いでがあった。ソ連人に頼んでウオッカを買ってもらい、三倍に薄めてちょうどよかった。私達の班で久しぶりに酒盛りをしたことを思い出す。

週一回は休みがあり、気候も良くなった。しかし、学習だけは続けられた。その頃、「日本新聞」なるものが配布され、日本の悪い面のみが大きく報道されていた。私は、樺太がどうなっているのか、親や弟妹のことが気になった。だが、どうすることもできない身の上である。

食糧事情が良くなったと言っても、パン、砂糖、油類は配給制であった。ノルマ達成者に券をくれ、それによって買う方法であった。民間人の生活も同じであり、行列をつくって買うことは日本兵と同じで、差別

はしなかった。彼らの日常生活は、黒パン、馬鈴薯とキャベツのスープである。調味料は塩と油だけであつたようだ。でも、人間的には良く、少ない中から「ヤボンスキー、食べなさい」。煙草をくれたり片言の会話で、昔の帝政ロシア時代が良かったとも話してくれた。日本人の方が安心して話せるし、現状の不満を言いたかつたのだろうと思つた。

シベリアに渡つた頃のシラミの大群は、火力による滅菌法でほとんどいなくなつたが、夜は南京虫に悩まされた。食われた跡が痛がゆく、夜中に南京虫退治をしたものだ。

二百ルーブルが支給されることによつてノルマ（作業量）が多くなつてきた。五台掘ると言つたのが、六台、七台となつてきた。ロシア人に「日本人は馬鹿だ、仕事はやればやるほど増えるようになっていゝからほどほどに」と言われ、誰言うもなく無理をしないことにした。仕事場へは月一、二回、責任者なるものが巡回に来た。別に文句も言わないが、ほめることもしなかつた。ただ、民族が違ふところなのかと思つ

た。日本では良い面を見てもらうために職場の整理等するが、彼らは平氣であつた。

夏になり、休みの日は収容所内の草むらで日光浴をしながら内地（日本）のことを語つたものだ。私は最後の兵隊の方であり、若かつたが、召集兵は内地に妻や子供がいるので良くその話を聞かされた。帰りたい気持ちは私より強かつたのだろう。涙を浮かべて話してくれたものだ。夏も終わつて、秋、冬と毎日の生活には変化がなかつた。寒い冬も三年目でなれてしまつた。そんなとき、映画を見せてくれるという報せがあつた。日露戦争の映画であつた。日本海海戦で、日本の軍艦の粗末なこと、ロシア艦隊に追われて撃沈される様子等があつたが、随分異なつた映画を見せられた。何の目的か理解できなかつたが、日本で発表されているのはウソであると言いたいのだろう。

三年目の春が来た。体力もついてあまり労働が苦にならなくなつた。調子を合わせて働くことも覚えた、無理をしないことにしたから。しかし、彼らの口ぐせは、良く働く者は帰れるということであつた。そして

五月に入った休みの日である。午後になって急にあたりが暗くなってきた。「日食だ」、誰かの知らせで表に出た。変化のない毎日であったので、久しぶりに珍しい物を見た感じであった。

そんなことがあった直後、「全員集合」がかかった。收容所長より話があるということである。何事かと三々五々広場に集まった。所長が一段高い台の上より「皆さん、長い間ご苦労であった。皆さんはいよいよ日本に帰ることになりました。身の回りの品を持って集まるように」との指示が出た。またかと言うつぶやきが聞こえた。私も今まで何回となく同じことを言われて各地を転々として来た。ここが一番良かった。本当に帰れるとは考えられないし、また移動によって大変な地に連れて行かれ強制労働させられるのだったら、一番長くいて仕事も慣れたし、一番住み心地が良いここを去ることなく、できればこのままの方が良いと思った。仲間の連中もそのような言動であった。不安いっぱいであったが、命令に従うより仕方がなかった。また夜行列車に乗せられての移動である。

翌日の夕方、どこかの港町に着いた。ソ連兵に聞くと、ナホトカということであった。二年半前、ここが上陸させられたところと分かったが、当時の面影は全く立派な港になっていた。日本兵が作業させられて造り出したそうである。各地で労働させられ、幾多の間を失った出発の港であった。大型船が横付けできる港に変身していた。私達は港町の近くの收容所へ入れられた。一週間くらい、特別な仕事も指示されず、雑役にかり出された。

「本当に帰れる」「信用できん」と意見が分かれたが、私達の他に日本兵が次々に到着している様子であった。北樺太のときも「皆が集結したらダメイする」。そして三年近く、複雑な気持ちであった。一週間くらい後、港が見える收容所に移動させられた。新品でないが日本の軍服等が支給された。別にうれしくもなく、日本に帰ることが実現することのみを願った。夕方、集合がかかった。日本の兵隊で民主主義な人とかいう人が、「いよいよ明日迎えの船が着く。こんなに長く迎えに来なかったのは日本政府の責任であ

る。同志の皆さんは日本島へ上陸することになる。ソビエトで学んだ民主主義運動の先頭に立ってもらいたい。そのようなことを演説していた。丸々太り、血色も良く、良い生活をしていたのだろう。頭が良いのか、我々を裏切つてうまく立ち回ったのか、そんなことはどうでも良かった。今度こそ本当に帰れるんだと信じた。その夜はどうしても寝つかれなかった。

次の日、「集合」の声、どの顔もうれしさを隠すことができないようであった。本当だろうか、信じて良いんだろうかとも思った。行軍が始まった。港の方である。地に足がつかぬとはこのことだ。大きな船が横付けになっていた。朝風丸、日本の船だ。誰かが叫んだ。船員の姿も見えてきた。日本人だ。これほど待ちに待ったことはないだろう。

いよいよ乗船。「ご苦労さんでした」。船員よりの言葉に思わず泣けてきた。誰もわからぬだろう。三年近くの苦勞、死んでいった仲間に申し訳ない。私は生きて日本に帰るんだ。全員乗り込んで、いよいよ船は動き出した。ナホトカの港が遠くの方に見える。いろいろ

ろな思い出をかみしめていつまでもいつまでも甲板に、シベリア大陸が見えなくなるまで見つめていた。船内で、日本の煙草が支給された。夢を見ているようであった。だんだん気持ちが悪くなってきたが、次に気になるのは親兄弟のことであった。樺太はソ連の地になっている。私は帰る家がないのだ。北海道の母方の家へ行くより仕方ないと思った。船中で配布された落ち着き先に記入した。

三日目、陸地が見えてきた。舞鶴港だそうだ。だんだん近づき、人影が見えるようになった。手に手に日の丸の小旗を振って出迎えてくれた。本当に帰って来たんだ。実感がわいてきたのもこのときであった。

思えば、北樺太、ナホトカ、食べ物のない寒さの中の労働、幾多の友を失った。各地を転々、そして生きのびて、今私は舞鶴の港に上陸したのである。日本島上陸なんて無責任な少グループ、もう誰を恨むこともないだろう。あのたくましい生命力があればどんなこともできるとしみじみ思ったのである。